

筆記試験の代わりにミニ課題—とにかいろいろやってみました！

小林麗, アルバータ大学

概要

アルバータ大学の春学期のオンライン日本語初級クラスでは、筆記試験や小テストなど筆記中心だった通常の評価方法から、口頭試験と17個のミニ課題から成るオーラル中心の評価に切り替えました。ここでは、ミニ課題の一部の紹介、学生の反応、そしてコース終了後の考察をまとめました。

実践内容の報告

アルバータ大学の日本語プログラムでは、2020年春学期に初めて100%オンラインでのデリバリーとなりました。当時は、オンラインで行うテスト等についての情報も実践例もまだ少なく、比較的カンニングのしやすい暗記ベースの筆記試験を単にオンラインに置きかえて行うことには不安が残りました。

そこで、筆記試験は思い切ってあきらめ、カンニングのしにくいオーラルパフォーマンスを中心に評価することにしました。具体的には、口頭試験の比重を引き上げると同時に、音声ファイルや動画を提出するというミニ課題を新しく導入しました。筆記試験で学習した内容を覚えているかどうかを見られなくなった代わりに、オーラルパフォーマンスで学習した内容をきちんと使えているかどうかを見ようと考えたのです。

ミニ課題では、筆記試験で試される分野を同じようにカバーすることを目指し、文字・表現（文法）・会話の3分野それぞれで、小さい課題を出しました。例えば、かな分野を評価するミニ課題では、10～15のひらがな単語のリストを与え、音読する練習をした後で、その中から5つを録音した音声ファイルを提出させました。

次に、文法分野では、指示語を習った後で、部屋の中のもの指さしながらクラスメートに説明するという動画を作らせました。例えば、近くのもの指さして「これは私のゲームです」、遠くのもの指さして「あれはお母さんの靴です」、最後にカメラに向かって「それは何ですか」とビデオを見ている人に問いかける、という感じです。

それから、会話分野のミニ課題では、会話の穴埋めを音声でやりました。二人で行われる会話の中の一人分のセリフを、間を空けながら私が録音します。学生は、その間の部分に適切なセリフを入れて会話を完成させ、録音、提出する、というステップです。6週間のコースで17個のミニ課題を出したので、学生が比較的簡単に完成させることができ、教師も比較的簡単に採点できるものを目指しました。

学生の反応

コース終了後にアンケートを行い、20名中13名から回答を得ました。ミニ課題に関しては、以下の3点を尋ねました：①ミニ課題の量は適当だったか、②ミニ課題の内容は適当だったか、③ミニ課題と通常筆記試験とどちらの方が自分の日本語力を正當に評価できると思うか。まず、①に関しては、ほぼ二日に一度くらいのペースで課題が出ていたにも関わらず、七割近い学生が「量はちょうどよかった」と答えていました。次に、②では、「学習の助けになった（10名）」「内容は適切（8名）」「クラスメートの作品を見るのは勉強になった（4名）」「楽しく勉強できた（3名）」など

おおむね肯定的な反応でした。一つ一つの課題が達成しやすい内容、長さのものだったことが、学生の評価を得たのではないかと考えます。③については、「ミニ課題のほうがいい(8名)」という学生のほうが「通常の筆記試験のほうがいい(5名)」という学生より多くはありましたが、通常の筆記試験を望む声も根強くあることが分かりました。結論としては、新しい試みだったミニ課題ですが、学生には比較的抵抗なく受け入れられ、また、その利点も理解してもらえたようです。

ミニ課題のよかった点

まず、評価方法として適切かどうかという点ですが、ミニ課題と口頭試験のオーラルを中心にした評価でも筆記試験の代替になり得るという手応えを得ました。今回のオンラインクラスの最終成績は、通常よりやや高めではありますが、おおむね妥当な線に落ち着きました。簡単な問題であっても間違いをする学生は一定数いたことなどから、成績を付けるのに必要な「差別化」は図れると感じました。

また、他の人の成果物を見て参考にするというのは、今まではあまりなかった新しい学習の機会だと思いました。早く提出したクラスメートの発話を深く考えずに真似した結果、同じ間違いをして減点されたケースもありましたが、これも学習の機会の一つです。ここで減点された学生は、次にクラスメートの成果物を見る時にはもっと気をつけて精査するのではないのでしょうか。

それから、課題のトピックには、自分や自分の身の回りの人・ものについて話させるものが多かったのですが、その結果、学生はより積極的に参加していたように感じます。簡単に他人の成果物を真似できないようにというのが主な理由だったのですが、身近な話しやすいものをトピックに選ぶことによって、参加のハードルが下がったのかもしれない。また、クラスメートや教師の生活を垣間見せてくれるビデオは、お互いの距離を少し縮めてくれたようにも思います。

ミニ課題でうまくいかなかった点

一番の問題はミニ課題の量でした。ミニ課題は全部で17個あったのですが、コースでは他にもワークブックの宿題や作文、口頭試験などがあり、それに加えて毎日の授業準備もあったので、教師にとっては完全にオーバーロードになってしまいました。結果、採点がまったく追いつきませんでした。タイムリーなフィードバックは、記憶が新しいうちに学生が自分の間違いを見直すことにもつながります。採点が遅れ気味だったということは、学生の学習機会を減らしていた可能性もあり、それはもったいないことだと言わざるをえません。

また、ミニ課題は、教科書を見ながらこつこつ準備して仕上げられるものなので、理解が追いついていなかった学生でも、そこそこの点数が取れてしまった部分がありました。そのような学生は、自分の理解が十分ではないという自覚もあまり持てていなかったように思います。自分の到達度を客観的に見直す機会を逃してしまうのも、ミニ課題のマイナス部分だと感じました。

さらに、ミニ課題の設定の仕方にも問題があったと感じています。新しく習った文法をすぐにミニ課題の中心に据えることが多かったので、結果、その文法の入った文を言わせることが主眼になりがちでした。どのような場面でその日本語が自然に使われるの

か、という視点を忘れていた結果、状況設定があいまいなままで特定の表現を使う指示だけを出す不自然な課題が多くなってしまっていたと反省しています。

改善の提案

まず、量が多すぎた点ですが、単にミニ課題の個数を減らせばいいという問題だけではないと考えます。もう少し大きい視点から、コース全体でカバーする内容やカバーする方法を考え直す必要があると感じました。オンラインデリバリーにはどうしても余分に時間がとられるし、学生のためにも教師のためにも、非同期の時間は必要です。つまり、対面授業でひとこま2時間でカバーしてきた内容をオンラインでもまったく同じ内容、同じ濃度で漏らすことなくカバーするのは、大変難しいということです。

ということで、COVID前までやってきた対面授業と今回私が行ったオンライン授業を比べてみました。まず対面授業を見ると、そこでの学習活動は、大きく分けて、クラスでカバーする部分と自宅で学生がやってくる部分の2種類があったと言えます。クラスでカバーする部分には、対面の授業プラス小テストや筆記試験など、そして、学生が自宅でやってくる部分には、教師が課す宿題と学生が授業についていくために自分で必要だと感じて行う自習が入ります。

私が今回行ったオンライン授業では、同じ内容を同じ濃度で届けようとした結果、対面授業とほぼ同じ総量をキープしたまま、クラスでできなくなった分を学生の課題部分に上乘せした感じになりました。ただし、学生への課題はイコール採点という教師の仕事になりますから、その結果、教師も学生も追加の負担で大変、ということになってしまいました。

そこで、次はこんなふうにしてみてはどうかと考えています。まず、今まで「自宅学習」という名前で一括りにしていた「宿題」と「自習」をあらためて見つめ直し、それを分けてみました。今までは、漠然と「宿題イコール自習のプッシュ」と考えて、ワークブックの練習問題なども、ほぼくまなく宿題として課していました。宿題として出さなければ、学生は勉強しないのではないか、という懸念が根底にあったわけです。けれど、学生の中には、練習問題の最初の数問ですぐ理解できる学生や半分すれば十分という学生だって、少なからずいたのではないのでしょうか。とするなら、もうわかっているけれど宿題だから仕方がないとページを埋めていく学生と、それを採点する教師、その両方の時間とエネルギーがとてもしんどいように感じます。

私は、この「必要に応じた自習」が、オンラインクラスで柔軟性を持たせられる部分、すなわちオーバーロードを減らすのに鍵になる部分ではないかと考えました。この「必要に応じた自習」の部分で、学生が自律的に行い、自己採点もできるようにしておけば、教師の負担は少なくなります。また、自分の必要度に合わせて量が調整できる、あるいは理解が早ければ短く切り上げて構わないとなれば、学生の負担感も軽減できるでしょう。

まだ、具体的な形にはまとまっていないのですが、学生が自分の理解度を測りながらどの程度やるか決められる「自己申告制の宿題」や、理解の早い学生は短時間で終わらせられ、理解に時間がかかる学生は何度でも繰り返しチャレンジできる「オンラインクイズ形式の練習問題」のような活動や課題が適しているのではないかと考えています。

仮に、このアプローチで進めていくにしても、まだ気をつけなければいけないことはあります。まず、学生の自律性に任せる部分が増えれば増えるほど、学生とのより緊密なコミュニケーションが必要になると感じます。例えば、課題のわかりやすいインストラクションや具体例の提示、こまめなフォローアップ、ループリックの明示と説明、などは必須です。何を求められていて、それをどう達成すればいいのかが明確に理解できていなければ、学生も自律学習が進められません。

それから、背中を押してもらわないとつい遅れがちになる学生、努力はしているが理解の遅い学生というのも一定数います。そのような学生は、自律性に任されてもうまく自分で舵取りができず、遅れていってしまう可能性があります。そのような学生のためにも、オンラインでは比較的实现しやすい個人面談を継続的に行い、こまやかな個別指導ができたらいいと考えています。

そして、もしミニ課題的なものを継続するなら、ここにも改善が必要です。今回の私の実践例では、「文法項目一つにつきミニ課題一つ」的なものが多かったのですが、ミニ課題は、そもそも「習った日本語が適切に使える」かどうかを見るための課題だったはずで、ですので、今回は、習った文法項目が実際にどのような場面で使われるかを考え、それを課題の設定にきっちり反映させていくつもりです。そうすれば、複数の文法項目を一つの課題の中に自然に盛り込むことも可能になり、結果的にミニ課題の数も減らせるだろうと考えています。

また、今回ほぼ全部の課題をマニュアル採点でやってみて大変な思いをした結果、やはりオンラインテストを活用しない手はないと感じました。繰り返し使え、自動採点もしてくれるオンラインテストがうまく使えれば、教師の負担を大きく減らせます。また、テスト的なものは、学生が自分の日本語レベルを客観的に把握するのに必要であると考えます。

共有会後の感想

今回の CAJLE の共有会では、多くのステップで学びがありました。まず発表準備の段階では、自分の経験を他人に伝えるために言語化するという過程において、自分の考えやこれからの展望を明確に形にすることができました。今回、一学期通してオンラインで教えた結果、クラスで得た手応えや学生にとってアンケート結果、学期中に同僚と交わした意見など、いろいろな知識の断片のようなものが、それなりの量、蓄積されました。とはいえ、これらの知識の断片は私の頭の中で漠然と漂っているだけで、完全には消化しきれていませんでした。しかし、CAJLE によって課された 15 分という過酷な制限時間内に収まるようにまとめていく過程で、この知識の浮遊物は少しずつ凝縮され、最終的には、自分がこれから何をしていきたいのかという明確なビジョンに昇華しました。現在も、この時のビジョンをベースにして、コースを進めています。

また、共有会本番では、他の先生方の知見や熱意をとにかくたくさん吸収することができました。オフィスで常に同僚と接している職場と違い、教師というのは教室に入れば一人です。ましてや、オンラインになってからは、スタッフルームでの交流さえなくなり、孤独感は増すばかりでした。そんな中で、共有会は、ふだんならありえない数の同業者のみなさんの体験や考えを聞く機会を与えてくれました。そこでは、違う視点や新しいアプローチなども学びましたし、同時に、自分と同じような不安と熱意を抱いて

がんばっている先生が他にもたくさんいるということが分かり、安心することもできました。オンラインワールドではついつい一人ぼっちに感じがちですが、積極的に他の先生とつながって、意見交換や愚痴交換をしていくことの大切さをあらためて教えてもらったように思います。

コロナ禍の中での日本語教育の現場では、まだしばらくは生みの苦しみが続きそうです。しかし、新しいことにチャレンジしてみて、それがうまくいったときの喜びには何にも代えがたいものがあります。おそらく学生も、同じような達成感を折々に感じているのではないのでしょうか。教師と教師、教師と学生、学生と学生、みんながお互いを支えあいながら新しい道を模索していくことで、COVIDの有無に影響を受けないより豊かな日本語教育の世界が築いていければと願います。

最後になりましたが、今回、共有会という貴重な機会を設けてくださった CAJLE に心よりお礼申し上げます。